10月20日発売予定

「ヨーヨー・マ　プレイズ・モリコーネ」完全生産限定盤（12cmCD＋DVD）

CD＋DVD:SICC 208～209 定価¥2,730（税抜価格¥2,600）

・CDは同内容

・DVD（約20分）

=ヨーヨー・マ、モリコーネのインタビューや録音風景を盛り込んだ映像。日本語字幕つき。

=南カリフォルニア大学映画学科の学生4人によるショート・フィルム収録。

（2004年9月29日現在）

マスター・サウンドはソニー・ミュージックエンタテインメントが、デジタル録音技術の永い経験から生み出した、数々の最先端技術の総てを集めて作られた、高音質・高精度のCDです。従来より16倍の迫力があり、16倍も音のきめが細かい20ビットなどのハイビット録音。その素晴らしい音そのままをCDに収録する、画期的な新技術SBM、録音編集の忠実度と精度を上げ、雑音をシャットアウトするハイクリア・デジタル。そして全信号を巨大なメモリーに蓄積し、高精度なカッティングを行う、究極のULTレーザーカッティング等の最新技術が使われています。音楽の感動を、今までにないリアルさでお伝えします。

〈取り扱い上のご注意〉●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。〈保管上のご注意〉●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

お問い合わせ：株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント 〒102-8353 東京都千代田区六番町4番地5

Sony Music Online Japan　*http://www.sonymusic.co.jp/*

Sony Music Official Site（洋楽）　*http://www.smj-i.com*　Sony Classical Official Site　*http://www.sonyclassical.jp*

※この紙は、再生紙を使用しております。

SICC 199

ヨーヨー・マ プレイズ・モリコーネ
YO-YO MA *Plays* ENNIO MORRICONE

『ミッション』
1. ガブリエルのオーボエ (3:11)
2. 滝 (2:27)

ジュゼッペ・トルナトーレ組曲
3. 『海の上のピアニスト』～愛を奏でて (1:49)
4. 『ニュー・シネマ・パラダイス』～ノスタルジア (1:58)
5. 『ニュー・シネマ・パラダイス』～ルッキング・フォー・ユー (1:43)
6. 『マレーナ』～メイン・テーマ (4:21)
7. 『記憶の扉』～メイン・テーマ (3:48)

セルジオ・レオーネ組曲
8. 『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』～デボラのテーマ (3:32)
9. 『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』～コックアイズ・ソング(やぶにらみの歌) (2:12)
10. 『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』～メイン・テーマ (1:48)
11. 『ウエスタン』～メイン・テーマ (3:21)
12. 『続・夕陽のガンマン/地獄の決斗』～黄金のエクスタシー (3:57)

ブライアン・デ・パルマ組曲
13. 『カジュアリティーズ』～メイン・テーマ (3:53)
14. 『アンタッチャブル』～死のテーマ (3:10)

『モーセ』と『マルコ・ポーロ』組曲
15. 『モーセ』～ジャーニー (2:34)
16. 『モーセ』～メイン・テーマ (2:06)
17. 『マルコ・ポーロ』～メイン・テーマ (3:21)

『レディ・カリフ』
18. ディナー (3:50)
19. ノクターン (2:33)

日本盤ボーナス・トラック
20. 愛を奏でて(『海の上のピアニスト』) (チェロ&ピアノ・ヴァージョン) (1:50)
21. ガブリエルのオーボエ(『ミッション』) (チェロ&ピアノ・ヴァージョン) (4:26)

(Total Time 62:18)

ヨーヨー・マ, チェロ
ローマ・シンフォニエッタ・オーケストラ with ジルダ・ブッタ, ピアノ
エンニオ・モリコーネ
(プロデュース/作曲/オーケストレーション/指揮)

ソニー・クラシカルから、私の音楽を偉大なチェリスト、ヨーヨー・マの演奏で録音するという話が来たとき、とても信じることができませんでした。大変うれしく、また、たとえようもないほど光栄に感じたそのときの気持ちは、音楽家そして人間としての素晴らしい体験のひとつとして永遠に私の心の中で生き続けることでしょう。

録音セッションの間ずっと、ヨーヨー・マ（さすがヨーヨー・マと思わせる見事な演奏でした）は尊敬と親愛の情を集めていました。それは私ばかりでなく、ローマ・シンフォニエッタ・オーケストラのメンバーや、彼の素晴らしい演奏に立ち会うという大変な幸運に恵まれたすべての人たちに共通する気持ちでした。

芸術的にも、またひとりの人間としてもとても貴重なこの体験を、私は決して忘れることがないでしょう。

——エンニオ・モリコーネ

（2004年8月に行われたインタビューより）

エンニオ・モリコーネは数多くの映画音楽を作曲し、過去半世紀に書かれた中でも屈指の美しさと不朽性を備えた音楽を生み出し続けてきた。だがモリコーネでもっと重要なのは、イタリア的なメロディの才能に前衛音楽の技法、サウンド、テクスチュアを大胆かつ表現力豊かに用いて融合させることで、映画音楽という捉えどころのない芸術を変えたことだ。モリコーネの映画音楽を聴くことは——瞑想的な『ミッション』だろうと緊張感に満ちた『続・夕陽のガンマン／地獄の決斗』だろうと——単に音楽そのものを味わうだけにとどまらず、映画の雰囲気や隠された意味、そして映画の核心の中に飛び込むことでもあるのだ。ヨーヨー・マがこの伝説的な作曲家と出会い、ともに仕事をしたあとで、「私にとってあなたは偉大な音楽家と言うほかはありません」と風変わりな賛辞を贈った理由はまさにそこにある。

この録音のためにオーケストレーションをするにあたって、モリコーネは自分の音楽を当初の文脈の中に保ちながら、ヨーヨー・マのチェロのために意味深い独奏を織り込もうと努めた。モリコーネはスコアの中に楽器のソロや歌詞のないヴォーカル・ソロを多用するが、彼の素晴らしい旋律——とても覚えやすいと同時に形式もきわめて独創的な——はヨーヨー・マの表現力豊かな芸術にとって格好の素材となる。だが2人の共同作業はモリコーネの期待をさえ超えるものとなった。今回の録音では、マはたびたびメロディを受け持つだけでなく、そのメロディに対する対位旋律を奏することもある。「彼の並はずれた巧みさは別として最高に素晴らしいことの1つは、彼がオーケストラの仲間になったこと」とモリコーネは言う。「オリジナルにいろいろな変更を加えたけれども、主題に関しては私がそれを書いた時と同じ全体的な雰囲気の中に置きたかった。私たちはこのチェロの巨人——偉大でとてつもないソリスト——を加えましたが、私は彼がオーケストラとの間に仲間意識を作り出したことに感動しました。明らかに彼は新しい要素なのに、全体の雰囲気は前と同じなのです」。

ヨーヨー・マにとっては、今回の共同作業は彼がいつも愛してきた音楽の新たな深みを明らかにするものだった。「リハーサルをしている時、私は彼が『ミッション』の音楽をどう書いているかを見ました」とマは言う。「これは華麗な音楽です。でも美しさは目を欺くことがあるし、表面的だったりもします。そこで中を覗き込み、彼が書いたものの血と骨と筋肉と、彼の技を見ると、その瞬間にわかりました。“ああ、これはすごい…本当の大作曲家だ”と。こんなにユニークで表情豊かな音楽をこんなにたくさん作り出す。私にとってはそれが素晴らしく感動的なことです。この音楽はとても深いところにまで達しています。私はそれを忘れることができないのです」。

デイヴィッド・フォイル

（訳：渡辺　正）

●イタリアという過剰、モリコーネという洪水

片山杜秀

14世紀に勃興したフィレンツェのメディチ家が長年かけてはぐくんでいった濫費と蕩尽の限りを尽くす生活様式から、たとえば18世紀のカサノヴァのような生々しい欲望の限度を知らぬ性の狩人を経て、20世紀に於けるヴィスコンティやフェリーニの爛熟と膨満に支配された映画まで。イタリアは、ヨーロッパの中でとびきり、ある種の無際限さ、何もかもが溢れかえり迸り続ける生々しく混沌と多様なありさま、過剰さと豪奢さ、底知れぬ胃袋といったものを追い求めてきた国であった。

そしてそういう性格は無論、音楽にも及んだ。ヴィヴァルディにロッシーニにヴェルディにプッチーニにベリオ。時代こそ違うにせよ彼らの音楽は、霊感の赴くままの奔放で多様な迸りに特徴づけられている。ドイツ音楽のように厳格で抽象的な構成や秩序や均衡が優先されない。音をひたすら肉感的に溢れかえらせ、聴く者の耳を溺れさせたいのが、イタリア音楽なのだ。その典型的表現媒体といえば無論、イタリアが本場のオペラである。それは、生々しい声と器楽の大音量、及び視覚的スペクタクルの相乗効果によって津波めいた過剰なエネルギーを爆発させ、理性を押し流すための芸術に他ならない。オペラは、主題を理屈で操作して聴く者の理性に訴えるドイツ的交響曲の伝統とはまさに対極にある。理性による整理や分析を拒むほどの多産性と無限性と多様性と豊穣さ、あるいはどんどん間断なく収拾不能なほどに生まれ湧きいで続ける感覚。それがイタリアなのだ。その意味で、今日に紛れもなくイタリア的伝統を継承する作曲家となれば、何はさておきモリコーネだろう。彼は1928年にローマでトランペッターの息子に生まれ、幼い頃から父親の吹きまくるジャズ、その他のポピュラー、クラシックに親しみ、自らもトランペットを手にして音楽家を志し、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院でペトラッシに作曲を学んだ。そして1950年代からクラシックとポピュラーの両方をまたにかけて大車輪の活躍をしだした。彼は演奏会用のオーケストラ曲や室内楽曲を書き、映画や放送のための伴奏音楽を手がけ、レコード会社のために歌謡曲の作曲から諸々の編曲まで何でもし、前衛的な即興演奏グループにも入って活動した。この際限を知らぬ多様さと過剰さ、音楽分野の垣根を洪水のようにあふれ出てゆく越境性によって、モリコーネは見事なまでにイタリア的である。しかも彼は信じられぬほど多産だ。手がけた映画の本数が400か500、演奏会用作品は約100、レコード歌謡曲も数百曲。まさに湯量の豊富な温泉のように汲めども尽きぬ作品数である。

それから肝腎なのは、彼の音楽の中身の特徴だ。ジャズ、ロック、ラテン、カンツォーネ、ムード・ミュージック、バロック、古典派、ロマン派、無調、民族音楽……。彼は時と場合と必要に応じて、変幻自在に手の内のいろんなカードを披露する。しかしそういう見てくれの違いを超えた、常なるモリコーネらしさというものがあるのだ。無調風でもラテン風でもバロック風でもどんな風でも、彼の音楽は、即興的に歌うように気ままに自然に感覚的に湧き出してくる感じを保つ。知的に精密に神経質に人工的に作り込まれる感じがしない。前者の感じをイタリア的、後者の感じをドイツ的と呼んでしまうなら、モリコーネはイタリアの権化なのだ。具体的にすれば、彼の音楽は、それが旋律的である場合なら、響きの外見がポップであろうとクラシックであろうと、しばしばドレドレとかドファドファとか、そういう2つの自然に口ずさみやすい音程をぐるぐる回るところからはじまって、そのままずっと行ってしまうか、そこからより変化のある旋律を紡ぎ出すかしたり、あるいはドレミとかミファソとかソラシとか、これまた自然に口にでやすいありふれた音階的動きからはじまって、そこからより個性的な旋律へとフワッと発展するかたちが多い。当盤なら「ガブリエルのオーボエ」や「やぶにらみの歌」などは典型的に前者に、「愛を奏でて」や『マレーナ』のテーマなどは典型的に後者に属するだろう。とにかく、モリコーネ節が自然と湧き出すようだというのは、そういう意味に於いてである。非常にシンプルで匿名的な、即ちどこの誰が口ずさみだしてもおかしくないような旋律の原細胞のようなものがあって、それが繰り返されながら好きなだけ増殖し変容して、いくらでも長く過剰に続いてゆくといったらよいか。

この、いつ果てるともない自然な歌声のような、いわば「モリコーネ感覚」は、彼が書く無調的・前衛的な音楽でも基本的には貫かれている。モリコーネの産む先鋭な響きは、怜悧に計算され尽くし、強い理知的自制心を持った、いわゆる頭でっかちな現代音楽と一線を画して

いる。それは即興性や肉体性を重んじ、ちょっと言葉が悪いかもしれないけれど、音が心ゆくまで垂れ流されるとでもいった風情を、しっかと湛えている。

当盤は、そんなモリコーネの無尽蔵な引き出しの中から、近年、とりわけ人気を誇る、メロディアスでカンタービレで滔々と流出するゆっくりめの型の、映画や放送のための音楽を主に集め、それらをチェロ独奏を主体とする作曲者自らの新しい編曲によって収録している。チェロは人間の肉声に近い音色を持つ楽器であり、モリコーネの自然な歌声感覚の旋律を担うのに相応しい。しかもそれを弾くのがヨーヨー・マなのである。クラシックからポピュラーまで、ピアソラもブラジル音楽も、よい音楽なら分野の別なく何でもこなす、その貪欲さや越境性によって、この演奏家は、イタリア的な過剰の美学の伝統と確かに繋がっている。モリコーネとマ。本当によい組み合わせではないか。

●曲目について

アルバムの劈頭を飾るのは『ミッション』のための音楽である。それはローランド・ジョフィ監督による1987年のイギリス映画で、題名はこの場合、伝道・布教の意。18世紀の南米を舞台に、その地にキリスト教を弘めるという建前とその地を植民地化し経済的収奪の限りを尽くそうという本音を使い分け、結局はやりたい放題のスペイン・ポルトガルの国家意志と、それに抗してあくまで建前に殉じようとする、ジェレミー・アイアンズ扮するガブリエル神父との葛藤が、壮麗にして豊饒な南米の自然の中で描かれる。モリコーネの音楽は18世紀ヨーロッパのバロックから古典派の様式と南米の民俗的な響きを当然ながら意識している。「ガブリエルのオーボエ」は、曲名通り、神父が布教先でオーボエにより奏でるもの。ここではもちろんチェロ主奏に編作されている。「滝」は雄大なイグアスの滝の景観に付されるもの。

ついで当盤は、モリコーネがコンビを組んできた監督たちの中から、3人との仕事をメドレーにする。

一人目の監督、ジュゼッペ・トルナトーレは、1956年、シチリア島に生まれたイタリア人。彼の作品は不確かにかすんだ記憶や思い出とか、若き日々や失われた時代への郷愁とか、ぼんやり漂うような不安定な感じとかを主題にすると映えに映え、そうした映画は、やはり夢の中でまどろむようなゆったりとした音楽を求めがちになる。

『海の上のピアニスト』は、1999年の米伊合作映画。客船のピアノの上に捨てられた、1900年生まれの赤ん坊が、そのまま一度も陸に上がることなく、客船付きのピアニストとなって、海の上を漂うだけで半世紀近くの生涯を終えるという、とてつもない話で、そこに20世紀なる不確かに漂流するような時代へのトルナトーレの思いが投影されている(この映画の制作年が1999年であることに改めて注意しよう)。主演はティム・ロス。「愛を奏でて」は、ピアニストが船に乗り合わせた美少女の面影に触発されて即興的に披露する曲。

『ニュー・シネマ・パラダイス』は、フィリップ・ノワレやジャック・ペランが出演した1989年の伊仏合作映画。トルナトーレの分身ともいえる映画監督の主人公が、若き日々を回想する物語である。彼はシチリア島で1940年代から50年代に青少年期を過ごし、映画館に入り浸って、映画に天国を見いだしつつ(シネマ・パラダイス!)、成長してゆく。この作品は古き良き映画の黄金時代への郷愁の念を一杯に湛えている。テーマ曲の「ノスタルジア」に“愛のテーマ”が接続されるが、後者の旋律の作曲は、エンニオでなく、息子のアンドレア・モリコーネ。

『マレーナ』は、2000年の米伊合作映画。第二次大戦期のシチリア島を舞台に、思春期を迎えた少年があまりにも肉感的な人妻(モニカ・ベルッチ)に恋い焦がれる。男が成長過程で必ず通過し、それなりのオブセッションとなってどうしても残ってゆく記憶が扱われるわけだ。

『記憶の扉』は、1994年の伊仏合作映画。脚本にパスカル・キニャールが参加し、ジェラール・ドパルデューとロマン・ポランスキーが主演したこの作品は、殺人事件を巡る幻想的な不条理劇で、犯人が実は被害者で、しかも彼はもう死んでいるのになぜか警察署に居て取り調べを受けているという、奇っ怪な話となっている。その取り調べの中で、混乱し遠のき曖昧となった記憶が徐々に整理されてゆく。つまりこの映画の主題は記憶であり、それはまるでトルナトーレらしい。

二人目の監督、セルジオ・レオーネは、1929年に生まれ、89年に没したイタリア人。日本と同じく第二次大戦の敗戦国で、米軍の大規模な進駐を経験したイタリアには、戦中・戦後のある時期、やはりアメリカへの強い憧れが生じていて、それは進駐軍相手のバンドでトランペットを吹いていたことのあるモリコーネも背負っているものなのだが、戦後イタリア映画界に於いてその種の憧れを最も強烈に体現した監督といえば、このレオーネだろう。何しろ彼は、アメリカ西部劇映画のイタリア流模倣、あるいはアメリカ映画界の国外下請け業者の作る非アメリカ製西部劇映画たるマカロニ・ウエスタン(というのは日本風の言い回しで、アメリカではスパゲッティ・ウエスタンと呼ぶ)の殆ど産みの親と言っていい存在なのだ。

『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』は、1984年に完成したレオーネの遺作。彼は、純然たるアメリカ資本によるこの3時間半の大長編で、あるギャング団に加わった人物群像を克明に描きつつ、アメリカ・ギャング映画への壮大なオマージュを捧げている。かの国に取り憑かれたレオーネの最後の映画というにあまりに相応しい。ロバート・デ・ニーロやジェームズ・ウッズらが出演。当盤では、エリザベス・マクガヴァン扮するギャング仲間のひとり、デボラの主題曲と、ウィリアム・フォーサイス扮する同じくギャング仲間の通称やぶにらみの主題曲、それから映画全体の「メイン・テーマ」が取り上げられている。

『ウエスタン』は、1969年のマカロニ・ウエスタン。ヘンリー・フォンダ、クラウディオ・カルディナーレ、チャールズ・ブロンソンら、米伊スターが競演している。

『続・夕陽のガンマン/地獄の決斗』は1967年のマカロニ・ウエスタンで、主演はクリント・イーストウッド、リー・ヴァン・クリーフ、イーライ・ウォラック。「黄金のエクスタシー」は、墓石に偽装された金塊を巡っての、この映画の最後の山場に付されたアレグロの音楽で、カンタービレなアダージョ系の多い当盤の中で、強いアクセントになっている。

三人目の監督、ブライアン・デ・パルマは、1940年生まれのイタリア系アメリカ人。ヒッチコックに傾倒し、スリラー、サスペンス、ホラー犯罪、ギャング物に力を発揮して、バーナード・ハーマン、ドナッジオ、エルフマン、坂本龍一といった幅広い傾向・世代の作曲家たちと仕事をしてきている。モリコーネは、アメリカ志向のレオーネと組むことでヨーロッパのみならずアメリカ映画界に認知されてゆき、次にこのアメリカの大物、デ・パルマと働くことで、ついにハリウッドでの地位を確立したといってよい。

『カジュアリティーズ』は、1989年のアメリカ映画。ヴェトナム戦争の最前線で狂気にかられたアメリカ兵4人がヴェトナム人の少女を暴行したうえ殺害し、その事実を隠蔽しようとするが、ついに露見し処罰されるという、戦争アクション+社会派物といった趣向の作品。マイケル・J・フォックスやショーン・ペンが出演した。

『アンタッチャブル』は、レオーネの『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』の3年後に作られたアメリカ映画で、やはりギャング物の大作。1930年代、禁酒法下のシカゴを舞台に、ロバート・デ・ニーロ扮するアル・カポネと、ケヴィン・コスナーやショーン・コネリーの司法・警察側の攻防が描かれる。アメリカ映画といっても、カポネもデ・ニーロもデ・パルマもモリコーネもみんなイタリアンというのが、この作品のミソだろう。

以上、3人の監督に捧げられたメドレーのあとは、どちらもイタリア主体による諸国合作のテレビ・ドラマ、『モーセ』(1996年)と『マルコ・ポーロ』(1982年)からのべ3曲がメドレーにされる。前者はベン・キングスレーがタイトル・ロールを演じた「旧約聖書」物で、後者はケン・マーシャル、アン・バンクロフト、バート・ランカスターに石田純一、丹波哲郎、アグネス・チャンらも出た、『東方見聞録』による歴史スペクタクルである。そしてモーセとポーロに共通するのは旅人ということだ。モーセはエジプトで奴隷となっていたユダヤ人たちを連れ出してシナイへと旅し、ポーロはユーラシア大陸を横断する。その長旅の様がモリコーネの息長く紡がれるメロディと重なるとき、ドラマの感慨が生まれる。

『レディ・カリフ(ラ・カリッファ)』は、アルベルト・ベヴィラックァ監督による1970年のイタリア映画。地方都市の工場で起きた労働争議を背景に、組合側のカリッファ(女指導者)と経営者側の工場長との恋愛ドラマで、そのテーマ曲は日仏合作のテレビ・ドキュメンタリー『ルーヴル美術館』(1985年)のテーマ曲に転用され、日本ではそのせいで有名になった。モリコーネのカンタービレ系アダージョの、ひとつの原点にして原型といえる音楽。

そのあと、このアルバムは、「愛を奏でて」と「ガブリエルのオーボエ」をチェロとピアノの二重奏に編曲したヴァージョンをアンコール・ピースのように聴かせて結ぶ。ピアノのジルダ・ブッタは、『海の上のピアニスト』のサウンドトラックなどでも弾いている、モリコーネの映画音楽演奏に欠くべからざる音楽家のひとりである。

ヨーヨー・マ

チェロ奏者ヨーヨー・マのきわめて多岐にわたる活動は、彼が聴衆とのコミュニケーションの方法を絶えず模索し続けてきたこと、ヨーヨー・マ本人が彼自身の芸術的な成長と革新を望んでいることを物語っている。新作の協奏曲を演奏する時だろうと、チェロのおなじみのレパートリーを弾く時、あるいは仲間と集まって室内楽を演奏する時、異文化の、西洋クラシック音楽以外の音楽形式に挑戦する時だろうと、ヨーヨー・マは想像力を刺激するつながりを常に見出そうとする。

ヨーヨー・マはソニー・クラシカルと独占契約を結んでおり、その50枚を越えるアルバム(うち15枚がグラミー賞を獲得)は彼の幅広い興味、関心を反映している。最新アルバムは「ヴィヴァルディ作品集」で、ヨーヨー・マにとってはじめてのヴィヴァルディ録音となった。演奏は「シンプリー・バロック」シリーズで共演しているトン・コープマン指揮アムステルダム・バロック管弦楽団。2003年には2枚のアルバムを発売し、1枚はチェロとピアノのためのフランス音楽作品集「パリ～ベル・エポック」でフォーレ、マスネ、サン=サーンスのヴァイオリン名曲を自らチェロ用に編曲し、ストット(ピアノ)と共演している。もう1枚、ブラジル音楽界のスペシャリストたちをむかえて録音した「オブリガード・ブラジル」*が世界的なベスト・セラーとなりヨーヨー・マにとって15枚目のグラミー賞受賞アルバムとなった(*2002年録音。ホーザ・パッソス、エグベルト・ジスモンチ、パキート・デリヴェラ、セーザル・カマルゴ・マリアーノらが参加)。このアルバムに関連したコンサート・ツアーも行われ、NY公演を収録したライヴ・アルバムも2004年2月にリリースされた。これまでにもヨーヨー・マは、ボビー・マクファーリンとの『ハッシュ』、マーク・オコーナー、エドガー・メイヤーとの『アパラチア・ワルツ』と『アパラチア・ワルツ2』(グラミー賞獲得)、『ヨーヨー・マ プレイズ・ピアソラ』など、ジャンルを超越した録音で成功を収めている。これだけたくさんのアルバムを出しながら、ヨーヨー・マはクラシック界で最もよく売れるレコーディング・アーティストの1人であり続けている。

ヨーヨー・マは、ソリストとしてオーケストラと共演し世界各地で活躍する一方、ソロ・リサイタルと室内楽の演奏にも力を注いでおり、両者をバランスよく活動している。ヨーヨー・マは非常に幅広いジャンルにわたる共同作業からインスピレーションを引き出し、エマニュエル・アックス、ダニエル・バレンボイム、クリストフ・エッシェンバッハ、パメラ・フランク、ジェフリー・カヘイン、ケイハン・カルホール、トン・コープマン、ハイメ・ラレード、ボビー・マクファーリン、エドガー・メイヤー、マーク・モリス、マーク・オコーナー、故アイザック・スターン、キャサリン・ストット、ウー・マ

ン、ウー・タン、デヴィッド・ジンマンといったアーティストたちと組んでプログラムを作り上げてきた。こうしたコラボレーションのどれもが、アーティスト同士の相互作用からエネルギーをうみ出し、それがジャンルの境界線の超越につながってゆく。ヨーヨー・マの目標の1つは、コミュニケーションの手段としての音楽、世界中の文化の垣根を越える思想の交流の手段としての音楽の追求である。その目標を達成するために、彼は独特の楽器を使う中国固有の音楽や、アフリカのカラハリ砂漠周辺の民族の音楽など、実に多様な音楽にたっぷりと時間をかけて没頭してきた。

この方面への関心をさらに深めたヨーヨー・マが創設したのが「シルクロード・プロジェクト」で、地中海から太平洋まで伸びていた古代の貿易路シルクロード沿いの地域の文化・芸術・知的伝統の研究を推進させようというプロジェクトである。この広大な地域における思想の流通を探求することによって、プロジェクトはシルクロード諸国の文化遺産を照らしだし、その伝統を現代において体現している“声”を突き止めることを目指している。シルクロード・プロジェクトが母体となって、様々な文化プログラム、教育プログラムが組まれ、数多くのフェスティヴァルにも参加している。2002年にはスミソニアン・フォークライフ・フェスティヴァルに出演した。(より詳しい情報はシルクロード・プロジェクトのウェブサイトhttp://www.silkroadproject.orgで。)

ヨーヨー・マは教育プログラムにも力を注いでおり、若い聴衆が音楽に親しむ手伝いをしているだけでなく、音楽作りへの参加も促している。ツアー期間中にわずかな暇を見つけてはマスタークラスを指導したり、音楽専攻かどうかを問わず学生対象に形式ばらない授業を開いている。

ヨーヨー・マは中国人を両親としてパリで生まれた。4歳から父親にチェロを学ぶ。間もなく一家でニューヨークに移り、そこで音楽家ヨーヨー・マの形成にとって最も重要な数年間を過ごした。その後はジュリアード音楽院でレナード・ローズなどに師事。音楽院でのトレーニングだけでなく伝統的な教養科目の教育を受けることを望んだヨーヨー・マは1976年にハーヴァード大学を卒業した。夫人と2人の子供がいる。

ヴェネツィアのモンタニャーナによる1733年製と、1712年製のダヴィドフ・ストラディヴァリの2台のチェロを愛用している。

ソニー・クラシカル資料より
(2004年9月現在)
訳:渡辺　正

DISCOGRAPHY

(2004年9月現在 *新品番、新価格で11/17発売予定!)

・ヴィヴァルディ作品集
トン・コープマン指揮/アムステルダム・バロック管弦楽団
CD:SICC 187

・オブリガード・ブラジル
CD:SICC 115

・オブリガード・ブラジル～ライヴ・イン・コンサート
(2003年9月24日ニューヨーク、カーネギー・ホール、ザンケル・ホール・ライヴ)
CD:SICC 185

・パリ～ベル・エポック
ヨーヨー・マ(チェロ、編曲)、キャサリン・ストット(ピアノ)
(2003年1月～2月録音)
CD:SICC 120

・ヨーヨー・マ　プレイズ・ピアソラ*
セルジオ&オダイル・アサド(g)、キャサリン・ストット(p)、ネストル・マルコーニ(bn)、アントニオ・アグリ(vn)、オラシオ・マルビチーノ(g)、エクトル・コンソーレ(b)
オスカー・カストロ=ネヴィス(プロデュース)、ホルヘ・カランドレリ(音楽監督)他
CD:SRCR 2670

・シルクロード・ジャーニー～出逢い～
ヨーヨー・マ&ザ・シルクロード・アンサンブル
CD:SICC 11

・ヨーヨー・マ　ベスト・コレクション
CD:SRCR 2702

・バッハ:無伴奏チェロ組曲(全曲)*
～インスパイアド・バイ・バッハ～
CD:SRCR 1955-6 (2CD)

・ヨーヨー・マ・プレイズ・ザ・ミュージック・オブ・ジョン・ウィリアムズ
ジョン・ウィリアムズ作曲・指揮/レコーディング・アーツ・オーケストラ・オブ・ロサンジェルス
CD:SICC 51

・『ナコイカッツィ』オリジナル・サウンドトラック
音楽:フィリップ・グラス
CD:SICP 218

・『グリーン・デスティニー』オリジナル・サウンドトラック
音楽:タン・ドゥン(アカデミー賞/グラミー賞 受賞作品)
CD:SRCR 2582